事件の特異性　しかと報じねば

参院選投開票 2 日前の安倍元首相銃撃事件、その後の動きをどう考えたらいいのか。マスコミの第一線で活躍する金平茂紀さんの表題「週刊テレビ評」（毎日 16 日夕刊）を抜粋して紹介する。

安倍晋三元首相が銃弾に倒れた事件。その衝撃の大きさは、自分史の記憶では、1970 年に作家の三島由紀夫が自衛隊に乱入し割腹自殺を遂げた時に受けたものに近い。

今回は戦後史のなかでも特筆される大事件であるのは疑いがない。なぜ大事件なのか。ひとつは首相、及び首相経験者が暴力によって殺害された事実にある。36 年の 2・26 事件で高橋是清大蔵大臣（元首相）が殺害されて以来の出来事で、もちろん戦後の日本では、首相殺害の例はない。

さらに、事件の態様の特異性だ。参院選の選挙演説中に、至近距離から手製の銃で撃たれた。運動員、聴衆、警護の警察官も含め、衆人監視の中で全くの虚を突かれた凶行だった。はっきりしているのは、容疑者の殺意の想像を絶する強さであり、取り押さえられた時ほとんど抵抗もしていなかった。現場にいた聴衆の中には、スマホで撮影していた人がかなりいた。それらの映像はネットやテレビを通じて瞬時に共有された。何度も何度もそれらの映像は視聴された。

事件翌日の社説などで、新聞各紙が「民主主義への愚劣な挑戦」（毎日）、「民主主義の破壊許さぬ」（朝日）、「自由な言論を暴力で封じようとする卑劣極まりない蛮行」（読売）と報じたのは理解できるが、その後、容疑者の動機に関する情報、宗教団体（旧統一教会）への恨みを募らせていった経緯が徐々に明らかになってきた。すると、一層この大事件の特異性が浮かび上がってきている。

入信した母親の多額の献金で一家は悲惨な暗転を遂げていく。家族全員が破滅に近い状況に追い込まれた事実と、容疑者の殺意形成の過程を今後、しっかりと報じていくことが報道の役割であろう。過去に「霊感商法」「集団結婚」といった旧統一教会がらみの出来事を、メディアが腹を据えて取材・報道していた時代を知る者のひとりとして、心の底からそのように思う。

死者の追悼と、真実の報道は峻別しなければならない。まして、政治家の「非業の死」を政治利用する行為は、死者を本当の意味で悼むこととは隔たりがある。このことをテレビは今、しかと肝に銘じるべき時である。

金平さんの記憶と重なるのは、大学時代に起こった三島自殺だ。あの時は信州大学の教授から聞いた。今回はネットで知り、ずっと事件を追いかけてきた。事件の特異性について、ジャーナリストの指摘に共感するとともに、私なりに継続的に考えていきたい。

（2022 年 7 月 20 日）